

■□ 記念講演

地域再生と協同
～協同組合に期待すること

内山 節（元立教大学教授、NPO 森づくりフォーラム代表理事）



ただいまご紹介いただきました、内山です。ぼくは、生まれは東京ですが、今から45年ぐらい前に、群馬県の上野村に魚釣りに行きまして、そこが気に入り今は、上野村に居たり東京に居たりという生活を半世紀近く続けています。

上野村といっても、西日本のみなさんにはほとんど馴染みがないに決まっているのですが、毎年8月になりますと日航機が墜落したという話が出てくる所です。そのときにテレビに映るかと思いますが、本当に山また山という村です。ですから、今日は上野村の話も含めてお話しさせていただきたいと思います。

はじめに、「地域」という言葉を使いますが、地域というのは線引きしたエリアのことではないわけで、地域が地域たりうるためには、地域のなかにいろいろな関係があることが重要です。わたしがいる上野村は、山奥の村ですから、まず自然との関係がありますし、伝統的な共同体という感じのものがけっこう根強く生きていますから、そういう人間同士の関係もあります。また、上野村には、伝統的な行事やお祭もありますし、もともと山岳信仰の強い村でしたから、山の中にどうということのないような石仏といいますが、ふつうの人たちが一所懸命に彫って置いたような石仏が1000体ぐらいあります。ですから、そう

いうものとも関係を持ちながら、わたしたちは村のなかで生きています。

村のなかには、いろいろな関係が存在していて、それが集積している。ぼくはそれを「関係の網」という言い方をしますが、その「関係の網」がつくられているものこそ「地域」だと考えています。

逆にいえば、「関係の網」が形成できなくなってしまうと、それはただの空間になってしまっていて、地域というものではなくっていくのだろうかという気がします。ですから、いま、「地域の再生」とか「地方創生」など、いろいろな言葉が使われていますが、もし地域をもう一度つくり直していくのであれば、そこにどういう「関係の網」を構築していくのかということが重要なのだろーうと思っています。

その「関係の網」のなかには、自然との関係もあるし、人間同士の関係もあるし、さらには歴史や文化、その土地の共有された土着的な信仰もあって、そこに地域が存在している、というふうに考えなければいけないのだろーうと思っています。

いま、「信仰」という言葉を使いましたが、厳密にいきますと、宗教や信仰という言葉は、明治になって翻訳語としてつくられた言葉ですから、明治以前の日本は宗教も信仰もなかったと考えてもらってかまわない。正確には、宗教や信仰は、仏教のな

かにあった言葉を持ってきて翻訳語に当てたのですが、一般的に使われている言葉ではなく、誰も知らないような仏教語を翻訳しようと思って一所懸命に探してきたものですから、「日本の明治以前の社会には宗教も信仰もなかった」と言ってしまっただけです。

ただ、そうすると、「そんなバカなことはないでしょう。日本には古代から仏教もあるし、八百万の神様もいるし、あれは何なのですか？」という話になりますが、明治以降の、わたしたちが考えているような宗教や信仰とは違うものだったほうがいいということです。

ものすごい乱暴な言い方をすると、明治以降は、宗教や信仰という言葉が入ってきたように、そういうものがキリスト教化したと言ってもかまわない。キリスト教の場合、立派な教義があって、それが聖書に書かれていますし、キリスト教集団・教団は組織形態を持っています。だから、教義と組織を両輪に置いて、そこに人びとが加わっていくというかたちが、先ほどわたしが「キリスト教的」と言ったあり方です。

明治以降になりますと、日本の宗教はそういう方向性に向かっていきます。つまり、教義があって、組織があって、そこに加わっている人たちが信者さんで、加わっていないければ信者ではない、というかたちです。

ところが、明治以前の日本の宗教や信仰は、明確な教義でもないし、明確な組織でもない。たとえば、ぼくのいる上野村ですと、山奥ですから、一番に祀られている神様は「山の神さま」で、たぶん2番目くらいが「水神さま」です。ぼくは山の神信仰や水神信仰が好きですが、何が好きかというと、あれは教義がほとんどないんです。強いていえば、「山の神さま」は森を守っているから、大事にしないと、山に入っ

たときにバチが当たるといって、それだけの話で、それ以上に立派な教義があるわけでもない。

また、山の神信仰は、組織を持ちませんので、村に行っても、「気に入ったから入りたい」と言っても、入るところもない。ところが、村に暮らしていると、森に包まれている村ですから、なんとなく「やっぱり山の神を大事にしながら生きてたほうがいいよね」という気分になる。ぼくも、生まれは東京だから、山の神には縁のない生活をしていましたが、しょっちゅう村に居るようになると、やっぱり山の神を大事にしたり、水神さまを大事にしたりするようになる。そうやって生きるのが村の暮らしですから、山の神信仰や水神信仰は、いつから発生したのかよくわからないところがありますが、それでも1000年以上は、記録から見ても続いています。人によっては「縄文時代から続いていたのではないか」と言う人もいて、そんなに記録があるわけではないからよくわかりませんが、「そうかもしれないなあ」としか言いようがない。

ただ、1000年ぐらい前から発生したと仮定しても、教義も組織もない。だから、仕切っている人もいない。ただ、そこで暮らしていると、「やっぱり、そういうものを大事にしながら生きてるほうがいいんじゃないか」という気分になり、自然になってくるわけです。

それで、旧暦の12月（新暦の1月）の12日に山の神の大祭があるのですが、そのときには山で仕事をする人たちはお酒を持っていったりして、山の神を祀っているところでお祭をやりまわすし、ぼくらのように、とくにやるわけではない人間は、行きたければ行ってもいいのですが、ちょっと山のほうに向かって、「きょうはお祭だった」といって、手を合わせる。

だいたい、その程度の話ですが、自分たちの生きる世界にしっかり土着化しているといえますか、根を張っている。そこには教団も存在しないし、教義もその程度のもので、なんらかの神社やお寺があるわけでもないし、とくに仏のようなものが存在するわけでもない。ただ本当に、自分たちの生きる世界のなかで、「こういうものは大事にしていこう」というものです。

もともとは、仏教が入ってきて、奈良や京都になると、総合大学みたいなお寺ができたり、朝廷や貴族の庇護のもとに大寺院が形成されたりしてきますから、少し性格が違うかもしれませんが、地域のお寺や神社は、もともとは自分たちの生きる世界のなかの中心になっていました。

江戸期になりますと、幕府の命令で、お寺がどこかの宗派に入らなければいけなくなりましたから、それによって「うちは天台宗にしよう」とか「うちは〇〇宗にしよう」となりますが、そんなことを人びとは大して意識しているわけではなくて、自分たちの生きる世界のなかにある仏やお寺や神社だった。だから、そういうものは、いま、わたしたちが宗教や信仰という言葉に込めている意味とはずいぶん違うものであり、宗教や信仰という言葉上でいえば、明治以前の日本にはそんなものはなかったのだという言い方をしてもかまわないのです。

また、そういうことから、人びとは神と仏を分けてもいなかったわけで、だいたい日本の神社やお寺は神仏習合的なかたちをとっています。ぼくは上野村の須郷という小さな集落にいますが、そこに須郷神社というまことに小さな神社がありました。そこには神主も誰もいなくて、小さなお堂があるだけでした。いまから20年ぐらい前に、村の集落の長老たちといひます

か、年寄りたちから共同で、「須郷神社を神社本庁から脱退させたい」という提案があって、その理由が「もともと、ここは須郷のお堂だった。だから、神様を祀っていたが、仏も祀っている。自分たちの祈りの場として、ずっとあった」ということなのです。上野村は山岳信仰が強いですから、須郷神社は、その山岳信仰とも結んでいる、神仏習合の小さなお堂でした。

そう言われて初めてわかったのですが、ここは神社なのに、境内には石仏がいっぱいあります。山奥なので、こっそり残してきたのですが、明治になって、慶応4年に官軍側から神仏分離を命じられて、神社は整理統合が進み、神社庁に統合されて、国家神道化されていき、ここまで来てしまった。しかし、これは本来の姿ではない。自分たちは子どもの頃から、「あそこは、いまは神社にしているが、本当は違うんだ」ということを教わってきたけれど、自分たちが死んだ後、若い人たちから見ると、わからなくなってしまうかもしれないから、生きているうちに元の神仏習合のお堂に戻したい。だから、神社本庁から脱退する。そういう共同提案なのです。

村ですから寄合があるのですが、寄合はすぐ終わらして、満場一致で可決して、神社本庁に対して脱退を通告することになりました。年間3000円の会費が納入されなくなるという程度の話なのですが、そういう動きが広がっては困るというので、神社本庁側とは少しもめましたが、集落の総意だということで押し切りまして、脱退しました。

じつは、いま、そういうところがけっこう増えています。地域の本来の信仰の姿に戻したい、ということです。これもまた、神社本庁に加盟して、国家神道の細部の細胞みたいな感じになって、結局、宗教を信

仰化したと言ってもいいわけで、そんなものとはまったく関係のない、自分たちの生きる世界の祈りの場に戻したということでもありました。

地域社会というのは本来、そういうことを含めて、いろいろな「関係の網」がつくられて存在していたものだ、というふうに考えればいいかなと思います。わたしのいる上野村ですと、いまの人口は1250人ぐらいです。ただし、これが多いのか少ないのかは難しく、江戸時代はだいたい1000人ぐらいの村でした。それが明治以降になると、山が多いから森も多いのですが、林業はほとんどやってきませんでした。なぜなら、木材を伐り出しても運べなかったからです。昔の木材輸送は筏を使って、川に下ろすというかたちでしたが、上野村を流れる神流川は激流で、筏を流せるような場所ではないから、木はいっぱいあるけれども林業的な村ではなかったのです。

ところが、そういうことで天然の森がたくさん残っていて、栗の木がいっぱいある。明治になって、鉄道を敷設するようになると、線路の枕木に最も適しているのは栗の木なので、山で枕木をつくって出荷するかたちになります。最初は、山奥で枕木にして、それをバラバラに川に流していましたが、そのうち奥まで森林軌道が引かれて、トロックで出すことが始まりました。それで初めて林業的なことが始まったのですが、林業といっても、木を植えるほうではなく、ひたすら木を出すほうです。

そんなことがあって、林業労働者が入ってくるようになって、人口が増えました。また、明治になって、近代産業が形成されるようになると、工業用木炭が必要になって、全国的に木炭の需要が高まります。そ

れで、上野村でも、炭焼きの人たちが入ってきて、炭を出荷することが始まり、そういう事情で人口が増えていったのです。

ただ、炭焼きも、いまはごく一部の人が楽しんでやっている程度ですし、線路の枕木はもうありません。というのは、栗の木は全部伐ってしまったので、ほとんどないという状況です。

そういう経過を見ていくと、最盛期の人口に比べて「過疎化した」と言っても、始まらないのではないかな。むしろ江戸期の、地域社会としてある種の循環型社会ができていた時代の人口を基準にしているのではないかな、という気がしています。そういう点でいうと、1250人という数は、多いのか少ないのか、判断が難しいという感じではあります。

ただ、もうひとつ言うと、上野村は、明治になって町村制ができてから一度も合併をしていません。平成の合併のときも、うちの村は「合併しよう」という人がまったくなくて、本当に満場一致で拒否という感じでした。

さらにいえば、上野村は、600年代から700年ぐらいにかけて律令制ができたとき、上山郷として登録されている地域で、それがそのまま上野村になっていますから、千何百年にわたって「上野村」としてやってきたという地域です。ですから、べつにこの数でいいのではないかなと思っています。

うちの村は、かつては養蚕や和紙の生産が中心でしたが、平坦地がほとんどありませんので、水田がない村でもあります。むしろ高く売ることができるような商品作物をつくったり、さらにそこに職人的な部分を交えて、いろいろなものを売って、逆にお米などは買うという地域ですから、それ

なりにやってこれたのですが、いまは養蚕もなくなりましたし、和紙の生産もやっていません。

そんなことがあって、これからどうしようということでもあったのですが、森が村の面積の96%を占めていますので、森林を上手に使いながら村を守っていく、というのが上野村の方針でもあり、悲願でもありました。

ただ、ご承知のように、いまは通常の林業をやっているのは、とても採算が合わない時代を迎えています。上野村では、山のなかで木を伐る仕事をしている人たちが25人ぐらいいて、その木の伐り方については、あくまで森を良くしながら使っていくというスタンスなので、木を伐ることが目的ではありません。伐った木については、以前から全量を運び出して、山のなかで伐り捨てはやらないという方針です。

上野村は、先ほど言ったように、合併が嫌いですから、森林組合も「上野村森林組合」ですし、農協も「上野村農協」です。木は、上野村森林組合の製材所に運び出して、多少は針葉樹もありますから、針葉樹系の木で使えるものは柱や板にして、広葉樹系でいい木が出ると、木工用の製材をします。天然林率が高いので、天然林を活かそうということになって、いまから40年ぐらい前に、村役場が主導するかたちで木工産業の育成を図り、いまでも上野村の主力産業のひとつになっています。お椀のような小さなものから、大型の家具まで全部つくりますので、漆の技術もかなり良くなっていて、現在、この方面で働いている人が40人ぐらいいるかと思います。

いま、村のなかで伐っている木は9000立方メートルぐらいですが、曲がって使え

ない木もありますし、製材すれば当然、使えない部分も出てきます。それがだいたい5000立方メートルぐらいで、こうした木は木質系ペレットの生産工場に運びます。この生産工場は、役場の直営で、いったんチップにしてからペレット化しています。

上野村は、イノブタ（イノシシとブタの雑種）を最初に生産した村でもあるので、いまでもけっこうイノブタの生産量があります。ただ、水田がないため、藁がありません。ですから、畜産場では敷き藁の代わりに木質チップを使っています。それは後で糞尿と一緒に回収されて、村の堆肥工場で堆肥化されて、村の畑に還元されます。

ペレットは、村にある4つの温泉がいずれも低温なので、その加熱ボイラー用燃料になります。また、冬の暖房用燃料として一般民家への普及を図っていて、かなりの家がペレットストーブに変わってきています。去年の春ぐらいからは、そのペレットの一部を使ってペレット発電を始めていて、最終的には地域電力で100%まかなうことをめざしています。

ただ、地域電力で100%にするには、ペレット発電は本命ではありません。というのは、山はたくさんあるから、木は無尽蔵にあると言ってもいいのですが、山がかなり急峻なので、低コストで下まで運べなくて、結局、使えないような木になってしまうのです。ですから、村の人たちが上手に使えるぐらいの価格でペレットをつくらないといけないし、そうすると、コスト的に合って、かつ山を荒らさない出し方をしなければいけない。

奥のほうですと、コストを下げるには林道網をつくるのが最もいいのですが（当初の投資は必要になりますが）、うちの村に下手に林道網をつくると、それが原因で山が崩落するなど、いろいろなことが起きて

しまうかもしれません。いまも安く出す実験をいろいろやっていますが、木を出すために無理な道をつけるみたいなことはやるべきではないと考えているので、そうすると、だいたい現在ぐらいの生産量かなと思うのです。

エネルギーの本命と考えているのは小水力発電で、すでに村のなかの川に国土交通省が造った砂防ダムがけっこう点々とあります。あれは上から水が落下してくるので、「あの落下水で発電させてくれ」と交渉しているのですが、いまのところ、「だめ」という回答です。熊本県の山都町に砂防ダムから発電しているところがありますが、あれは熊本の県営ダムだからできるのであって、国土交通省側の持っているところはゼロ回答です。でも、粘り強く交渉を続けていて、それができるようになると、地域電力として100%できるだろうと考えています。

もうひとつ、山から出してくる木のなかにコナラやミズナが多少入ってきますので、これはオガクズ化して、キノコの生産に回します。キノコの生産も、上野村の主力産業で、去年の出荷額で4億円ぐらいですから、村の産業としては大産業です。

これらを通じて何をしているかというところ、結局、村のなかに持続可能な労働体系をつくらうという試みなのです。つまり、村のなかにどういう経済をつくらうかという発想ではなくて、村が持続するにはどういう労働だったら可能かということを考えているわけです。

そうすると、山のなかで木を出してくる人たちも必要だし、それをいろいろなかたちに加工する人たちも必要だし、その木の一部は畜産の敷き藁代わりに使われたり、

燃料になったり、電気になったり、さらにはキノコの生産に回ったりします。去年からは、オガクズ化したものからキノコが出なくなったものもペレット化しようということで、その技術開発にも成功していますから、完全に循環系のものがほぼ出来上がってきたことになります。

したがって、この労働体系を守っていけば、村は持続できるぞ、というかたちをつくる。ただし、採算の合わないことばかりやっていると継続が難しくなりますから、継続するためにそれぞれの労働をどのように採算に合わせるか、というところで経済的な工夫が始まっています。初めに経済で儲けようという発想になってしまうと、地域社会は逆におかしくなると考えていて、むしろ自分たちの地域を守っていくにはどういう労働体系が必要かを考えているわけです。

その労働体系のうち、すべてではなくても、全体として採算が合っていればいい。しかし、全体として採算が合うぐらいに持っていくには、やはり基本的な部分においては経済的にも成立するようにしていく。だから、労働があって、次に経済を考え、そこではいろいろな工夫をする。そういうふう考えているわけです。

いま、徐々にそういうかたちに出来上がってきているので、なんとかなるかなと思っていますが、けっこういろいろなことをやっていますので、このような村づくりをすると同時に、森の整備も進めています。結果としては、けっこうきれいな森が出来上がってきていて、村のなかには保存林にしているところもありますし、いろいろなパターンがあって、そういう森や川や村の雰囲気は、ある種の観光資源にもなってきた

ています。

去年、うちの村にきた観光客の数は、だいたい 21 万人です。これは 1250 人の村としては、かなり多いと言ってもいい。だから、産業的にはひとつの産業になっているのですが、いわゆる観光地型の開発はまったくしていません。もちろん、宿泊施設をつくったりはしていますが、娯楽施設をつくるみたいなことはまったくしていない。そういうことを通して、村づくりをして、自然を守っていく。そういうものが醸し出す雰囲気がある種の人たちからすると「行ってみたいな」という場所になっていて、その意味での観光地でもあります。

このように、けっこう新しいことをやっているし、また上野村のペレット発電機は、じつはペレットを燃やして発電しているのではなくて、ペレットを蒸して、ガスを発生させて、そのガスでエンジンを回すというやり方を採っています。この方式を採用した製品は国産にはないので、ドイツ製の発電機を入れています。

この発電機が入っているのは、日本では上野村だけです。エネルギー効率でいえば、ペレットを燃やすやり方のエネルギー効率は約 20% ですが、ガス化してエンジンを回す方式のほうは 33～34% で、5 割ぐらい効率がいいと言われています。

しかし、実際の熱効率はもっと高く、最終的に 80% を超えるぐらいです。というのは、うちのキノコ生産の主力はシイタケですが、キノコは菌糸が伸びていく過程で自分で熱を出すので、室内生産で安定的に生産しようとする、室内がだんだん熱くなります。ところが、キノコは、菌糸を伸ばす過程では熱を出しますが、キノコが成長するためには冷えてくれないと困るので、1 年のうち 9 カ月間は冷房を使う。そ

こで、キノコを大量につくっている場所の横に発電機を置いて、発電で残った熱を回収して、その熱を使って冷房をしています。廃熱だけでキノコの冷房がほぼ間に合うようにしているわけです。

こんなことをやっている、よそから来た人たちに「おたくは山奥なのに、ずいぶん新しいことをいっぱいやっているんですね」といわれます。たしかに新しいことはやっていますが、わたしの考え方としては新しいことではないので、「これは伝統回帰です」とお答えしています。なぜなら、もともと地域エネルギーで生きてきたのが伝統であって、その地域エネルギーの主力は薪でした。だから、あの時代に戻りたいのです。そのために、いわば薪を使って生きる村をつくらうとしているのだ、ということ。

ただし、生活形態も変わっているし、社会のあり方も変わっていますから、そっくり昔の形態に戻そうとすると、逆に戻れなくなってしまいます。だから、昔の伝統に戻すために新しい技術を使う。したがって、決して「ドイツから新しい技術を導入しました」という話ではなくて、どうすれば伝統の地域エネルギーで暮らす村に戻せるかを考えた結果として、ドイツ製の発電機を入れたのです。

小水力発電も、昔は補助的なエネルギーとして水車があったので、あそこに戻ろうとしているということです。いまは水車ではなく発電機という、昔とは異なるかたちにはしていますが、村を流れる川の水を使って自分たちのエネルギーを得るというのは伝統回帰です。

だから、うちの村がやっていることは、じつは伝統回帰なのであって、共同体を大

事にしていこうというのは、伝統をしっかり守ろうということです。

じつは、いまの社会で新しい動きを示している人たちがやっていることは、ほとんど伝統回帰です。たとえば、そこらじゅうで言われている「コミュニティをつくろう」とか「もう一度、関係性をちゃんとつくろう」というのは、伝統回帰です。ただし、江戸時代の結び方をそっくり真似しようとしているんですね。しかし、社会も変わっているし、生活の仕方も変わっていますから、そのやり方では伝統回帰もできなくなる。だから、どのように関係性をつくったらいいかとか、どのようにコミュニティをつくったらいいか、というのは新しいことを考えなければいけないけれども、そこに戻っていこうとしている点では伝統回帰です。

あるいは、いま多くの人が感じている、「自然と人間の間関係をもう一度確認したい」というのも伝統回帰です。ただ、自然と人間の間関係の具体的なあり方になってくると、いまのような都市中心の時代における自然と人間の間関係というものを考えなければいけない。ただし、一度、自然から離れた人間たちが、もう一度、自然と結び直しをしようというのは、ひとつの伝統回帰であると考えてもよい。

だから、いまの時代というのは、じつは奥のほうではいろいろな意味で伝統回帰が進んでいるし、そういうなかで宗教や信仰ももう一度見直していくといえますか、むしろ自分たちの生きる世界のなかに宗教でも信仰でもないかたちで根付いていたかたちをもう一度見直すことも、徐々にではありますが進んでいる気がします。

また、上野村では、じつは1250人のう

ち250人が移住してきた人で、いわゆるIターン率は20%です。ただ、われわれは最近、「Iターン」という言葉はやめようという感じになっています。

というのは、たとえば村の人のところに村外からお嫁さんが来ても、そのお嫁さんのことはIターンとは言わないのに、Iターンで移住してきた人と村の女性が結婚をすると、奥さんは村の人だけど、男性の人はIターンということになる。これはどう見ても変な話ですから、「もうIターンという区分はよくない。『村でしっかり暮らしている人』でいいじゃないか」という感じです。

それから、上野村には、外部から協力してくれる人たちが非常に多くいます。ペレット発電機を導入しようというときも、東京にいる協力者たちが世界中のペレット発電の仕組みを調べあげて、その結果として、どれがいちばんいいかを考え、ドイツ製の発電機を探し出しました。その人たちは、ドイツに行って、現地で使われている様子も調べたりして、導入することになったわけで、上野村のいろいろな取り組みはそういう人たちがいるからできている、という面があります。

つまり、上野村は、移住者も多いけれども、村外の協力者たちもいて、その人たちも含めて村づくりをしているということです。

これもほくらは伝統回帰だと思っていて、かつての地域社会はよそから入ってくる人たちがけっこう多かったのです。昔は、男性が養子というかたちで入ってくる場合もありますし、養蚕などで入ってきた人たちがそのまま村に住み着くこともあって、そういう人たちがけっこういましたが、高

度成長期以降は、出ていく一方になって、入ってくる人がいなくなりました。そのことによって村はさびれたわけで、いろいろななかたちで入ってこれる村に戻すというのは、じつは新しい村づくりではなくて、伝統回帰だと考えています。

たとえば福島原発地域は、もう幕末に近い江戸後期の天明の大飢饉のときに、冷害でひどい目にあったところで、その結果、村がかなり崩壊したと言ってもいいぐらいです。江戸後期ぐらいになると、村の人でも都市部とのつながりを持っているので、村で農業がやっていけなくなると、都市部に逃げ出してしまう人がたくさん現れました。いわゆる逃散という形態ですが、結果として、村がガタガタになってしまいます。

そのときに富山県から、ボランティア的な人たちがたくさん入ってきました。なぜ富山から大量にきたのかというと、東本願寺のつながりで、富山県は本願寺系の勢力が強いのに対して、福島原発地域の辺りも東本願寺系が強いのです。「同朋がひどい目に遭っている」というので、富山からボランティア的な支援がいっぱい来て、その結果として、そこに住み着いた人たちがたくさんいるので、あの辺りは富山系の姓の人が多いです。

そのおかげであの地域が復活したのですが、ときにはそういうかたちで大規模に入ってくる時期もあったし、三々五々入ってくるなど、いろいろな入り方がありました。それができなくなってしまったということが、むしろ過疎化を生んだし、地域をさびれさせた。だから、もう一度、いろいろな人が入ってくるような地域をつくる。そのことで、新しい能力を持っている人たちも入ってきて、地域づくりをしていくということです。

それから、かつては養蚕が中心の村ですから、仲買さんなど、いろいろななかたちで人が訪ねてきて、そういう人たちがいろいろな情報を提供したり、次に来るときには地域に役立つ何かを持ってきたりしました。そういう交流のなかに地域の活性化みたいなものがあったのですが、これもやはり高度成長期以降、なくなりました。

だから、いま外部の人たちとの関係を結ぶということをして、「新しいことをやっている」と捉えるのではなく、「一度なくなってしまった外部との関係を、もう一度、回復する」と捉えると、「伝統回帰」ということになります。

そういうことを積み上げながら、地域づくりをやっているの、なんとかなるんじゃないかと思っています。ちなみに、1250人ですが、去年、村で生まれた新生児は10人ちょっとで、人口比でいえば東京並みです。

それから、去年の春の中学生の意識調査で、「将来、どこで暮らしたいか」という質問項目については、100%が「上野村」という回答で、ちょっと驚きました。しかし、大学に行ったりしますから、「あてにはならないよ」と話したりしていますが、いずれにせよ、村は暗い雰囲気ではなくて、「うちの村はいいぞ」という雰囲気なのです。だから、中学生が「上野村で暮らす」と言うのも、わからないわけではありません。

本当の意味で「地域創造」をしていくとき、最終的に何が課題になるかというと、近代社会が形成される前の地域社会は、その地域社会をつくっているさまざまな要素が一つずつの要素として独立していなかったということです。

たとえば経済というのは、地域の経済活

動が地域の社会でもあるし、そこに自分たちの暮らしもあったし、経済のなかにいろいろな文化や信仰もあった。経済というのは、収入を得る経済もあるし、収入にはならないけれども自分たちの社会をつくっていくうえでは非常に有効なものもある。これは田舎にいればどこでも同じですが、自分たちの食べるものをつくったり、それを近所に配ったり、そんなことをお互いにやり合っている。そんな経済は、田舎に行けばどこにでもあって、これもじつは経済活動ですが、いわゆる収入を提供してはいない。

つまり、収入になる経済もあれば、収入にならない経済もあるけれども、収入になるような経済も、じつは地域社会のあり方と結んで行われていたのです。

ところが、近代になると、経済、社会、生活、文化、信仰などが全部、それぞれ独立した要素になってしまう。その結果として、経済が力を持って暴走するようになり、最終的には経済が発展すると他のものが壊されてしまうという事態に陥っている。だから、経済の発展が、逆に社会をズタズタにしてしまったり、人びとの生活も「経済のために生きている」みたいになってしまって、ちゃんとした生活ができない。文化も壊れていくし、土着的な信仰はどこにもなくなっていく。そういうことが進行していくので、近代社会のいちばんの問題点は、われわれの生きる世界を構成していたはずの、さまざまな要素がバラバラになってしまって、そのなかの経済が暴走するようになった、ということです。

つまり、経済、社会、生活、文化など、いろいろなものをもう一度、一体性のあるものに戻さないと、いまのような時代が克服できない、ということでもある。だから、どういう経済なのかということを考える前

に、どういう労働をつくれば自分たちの社会は持続できるかを考える。その労働のなかに、生活も絡んでいるし、地域社会のあり方も絡んでくる。そういうなかに自分たちの労働の文化や、生活の文化や、地域の文化も密接に絡んでくるし、伝統的な地域では、地域の信仰も絡んでくる。そのかたちに、どうやって戻していくか。

ただ、いまの社会のなかで生きていこうとすると、その労働のかかなりの部分に経済性がないと持続性がないので、そこではいろいろな工夫もするし、外部の人たちの協力も得ながら、一緒になっていこうとするわけです。

この、「もう一度、一体性を取り戻す」とか「経済を一体的世界のなかにもう一度、埋め戻す」ということも真剣に考えていかないと、おそらく地域はちゃんとしたかたちでつukれないだろうという気がしています。

多くの市町村長さんたちが考え方を間違っているのは、「雇用場所ができれば地域が再生できる」とか「経済が発展すれば、地域が再生できる」というようなところで。しかし、間違っはいけないのは、経済が衰退したから地域が衰退したわけではない、ということです。どんな農山村に行っても、以前より経済は発展しています。いま、田舎に行けば、複数台の車を持っているのは当たり前ですし、電化製品もほとんどそろっています。もし「都会の家には電化製品がそろっているけれども、田舎の家には電化製品がほとんどない」というのなら、「この遅れが地域を衰退させた」という言い方ができるかもしれませんが、いまは田舎の家にも電化製品が全部あるし、むしろ田舎のほうが大型のテレビや冷蔵庫があったり、さらには車が3台ぐらいあったりします。

このことに示されているように、田舎は田舎的に経済が発展してきたと考えていいし、昔のように、子どもが進学期を迎える頃になって、「田舎の子どもは、お金がないから進学できない」などという話も、いまはほとんどない。子どもを大学に行かせたり、いろいろなものをそろえるぐらいは、十分できるようになっている。だから、経済発展したと言ってもかまわない。むしろ、経済発展したから地域は衰退した。そのことの意味を考えるべきだと思います。

これにはいろいろな点で誤解があって、たとえば地方都市では「シャッター街」が問題になっています。なぜシャッター街ができるかという、シャッターを閉めても生活できるからです。逆にいえば、東京ではシャッター街ができにくい。なぜなら、シャッターを閉めたら生活できないからです。

だから、東京でお店をやる人たちは、石にかじりついて店を持続させようとします。レストランなら、次々にメニューを工夫してでも、とにかくそこでやらないと生きていけない。あるいは、何かを売る店でも、石にかじりついて続けないと自分たちは崩壊してしまうから、必死にならざるを得ない。それを「活力」と見るか「気の毒」と見るかの違いですが、東京というのはそういう場所ですから、逆にいえばシャッター街はできようもない。それがいままでの歴史です。

それに対して、地方都市ではシャッターを閉めても生活できる。もちろん、もう年をとって、そんなに金銭がなくても生活できるとか、家は自分のものだとか、いろいろなことがあるにせよ、シャッターを閉めてもやっていけることに変わりはない。だから、シャッター街というのは、あ

る種の豊かさがつくりだしたと言ってもかまわないわけで、もっとギリギリで生きている人たちが集まってくると、いまの東京みたいに、「必死になってやるしかない」という街を形成する。そう言うってもかまわないのです。

いまの地方には、そういう一面があって、決して経済基盤が崩壊したから衰退しているわけではない。むしろ、ある種の豊かさが崩壊を促進していると言ってもかまわない。数字だけ見れば、たとえば山奥で国民年金だけで暮らしているおじいさんやおばあさんはかなり貧しいという話になりますが、じつは国民年金だけで暮らせる基盤がある。これはある種の豊かさがそうしていると言ってもいいわけで、経済発展は地域発展の基盤にはならないと考えてもよい。むしろ東京などがそうですが、「経済的な逼迫性が地域の活力をつくっている」と言うってもかまわない。そういう点でも誤解があります。

さらにいえば、雇用場所なんて全然、意味がない。なぜなら、雇用場所は、たくさんそろっていて、選択できて、初めて雇用場所になるからです。たとえば「自分たちの地域に、こういう会社ができました。従業員を30人ほど募集しています」と言われて、その地域に帰るでしょうか。その会社の仕事内容が自分のやりたいことと合致していれば帰るかもしれませんが、自分のまったくやりたくないような仕事があるとしても、やっぱり意味がない。

さらに、むしろ田舎は労働力不足になっている、という現実も読み間違えています。ぼくの村でいえば、村外に働きに行く人はほとんどいませんが、周辺から上野村に働

きに来る人は何十人もいます。つまり、上野村の人口だけではまかなえないぐらい雇用場所があって、人手が足りなくなっているということです。キノコ生産だけでも何人もいますから、むしろ村は働きに来る場所になってきている。ちゃんとやっていこうとすると、そうなるのです。

いまでも、森林業は労働力不足になっているし、農業も労働力不足になっていますから、そういうものがちゃんと展開できるようにしておけば、そこにまた人が入ってきて、逆に「雇用場所になる」という言い方もできる。ですから、いわゆる「雇用場所」といわれているのも、大きな考え違いという感じがします。

むしろ地域社会の魅力を高めていこうとすると、バラバラになってしまった「生きる世界」の要素を、もう一度、一体化させて、その社会に経済を埋め戻していく。そういうことをしていったときに初めて魅力ある地域ができていく、と考えてもよい。つまり、東京など大都市の超縮小版のような地域は、じつは何の魅力もないと言ってもよい。「ここには大都市にはないような地域社会があるんだ」ということをつくらなければいけないということです。

そういうことをするには、いろいろなやり方があって、地域にかなり根を張るかたちでやっていける地域もありますが、都市部になると、そういう地域を形成するのは非常に難しいことも確かです。ただ、最初に申し上げたように、関係性によってつくられているのが地域ですから、その関係性とともにあるものは、ひとつのローカルなものとして捉えてかまわない。それは地域というものではないかもしれないけれども、ある種の「関係性の網」がつくりだした空

間という意味で、ローカルなものとして捉えてかまわないということです。

その関係性のなかには、ときには自然との関係もありうるし、ときには人間同士の関係もあるだろうし、文化的な関係もあるし、子育てなどを通じた関係性もあるでしょう。

ただし、「コミュニティ」というと、「地域コミュニティ」とか「テーマコミュニティ」という言葉がよく使われますが、ぼくはあの言葉は全然、信用していません。というのは、研究者は整理するのが大好きだから、すぐに「伝統的なのは地域コミュニティだ。大都市はテーマコミュニティだ」というふうに整理するんですね。それで、なんとなくわかったような気になって、満足してしまうけれども、ぼくはあんまり信用していない。

なぜなら、たしかに上野村も地域コミュニティかもしれないけれども、そのなかにはテーマコミュニティがいっぱいあるからです。たとえばお寺の檀家さんのコミュニティがあったり、神社の氏子さんのコミュニティがあったり、伝統を守っているコミュニティがあったり、職業別のコミュニティもあって、上野村のなかには小さなコミュニティ、あるいは小さな共同体がいっぱいある。それが集積しているのが上野村であり、そうすると地域としても「ここは共同体的な社会だな」ということになります。

言い換えれば、「共同体的な社会」とか「コミュニティ型社会」というのは、そのなかにいろいろな小さなコミュニティを内在させていてこそであって、その小さなコミュニティの多くはテーマによってつくられている。だから、テーマの集積が地域をつくっている、という言い方をしてもかまわないし、あまり二分法的に分けないほうがいい

ということです。

そういう視点から見ていくと、都市部において、テーマや自分たちの課題に基づいたコミュニティが形成され、それが重層的に積み上がってきたとき、そこには、地域ではないかもしれないけれども、わたしたちの生きていくローカル世界のようなものが形成されていくし、それでいいのだらうという気がしています。

そういうところではいろいろな試みがあって、経済をもう一度、社会に埋め戻そうとすると、ソーシャル・ビジネス的といいますか、社会的な役割を自分たちで考えながらやっていくものも起きてくるし、それはときには「エシカル・ビジネス（倫理的ビジネス）」という言葉で呼ばれていて、そういうことのなかに「協同」をいかにもう一度つくりあげていくかという課題もある、と言ってもいいと思います。

だから、「協同」についても、協同組合というかたちになったら本当の協同の世界ができるわけでもなくて、むしろ協同組合をつくったときの理念はいいけれども、だんだん巨大な組織をつくっていった、いつのまにか「これ、協同組合なんですか？」という協同組合になってしまう、というのはよくある話です。

ドイツの住宅協同組合もそうですし、日本の農協もそうですから、協同組合であれば、ちゃんと協同であるわけでもない。むしろ絶えず、自分たちの協同の世界とは何か？ということをつえ直して、再生する試みが必要だということです。

冒頭に申し上げたように、近代社会が提起し、「普遍的な理念だ」と考えられたものが、普遍的な価値を持たなくなっていて、今後もそれはいろいろなかたちで進んでい

くだろうと思います。

たとえば今回、イギリスで国民投票がありました。近代社会の仕組みとしては、みんなの意見を聴くという話になると、国民投票がいちばんいい方法ということになりますが、国民投票は本当に最適な方法かということになると、なんとも言えなくなります。つまり、上手な煽動者が勝つ、ということになってしまうからです。あるいは、アメリカの大統領選でも、国民が大統領を選ぶのは、近代の仕組みとしては最も民主的な方法と言わざるを得ませんが、ここでも煽動者が勝つという話が出てきたりします。そして、いま参議院選挙に入りましたが、今度の参議院選挙でも、うまく誘導することに成功したところが勝つというように、絶えずそういう問題が起きてきます。

しかし、だからといって「選挙はもうやめましょう」という話にはならない。選挙という制度は、いまのところ他にいい方法がないから大事にするしかありませんが、実際にはもうボロボロだと言ってしまうのもよい。「次の方法が見つからないから、とりあえず大事にしましょう」という感じです。

じつは民主主義というのは、小さな組織にしか成り立たない仕組みです。たとえば自分たちの協同の集まりみたいなものが、せいぜい数十人ぐらいの規模で、地域的につくられていて、そこではみんなの意見を集めて、議論して、自分たちの方針をつくっていくというのは、やりようによってはうまくできます。

しかし、何百万人を相手にした民主主義というのは、じつは成立しないわけで、そうなれば上手に煽動してくれる人が勝つという問題が起きてしまう。だけど、他にいい方法がないから、とりあえずこの方法で

…と言っている。いまはそんな時代です。代議制民主主義も含めて、じつはもうボロボロになっているのですが、「しょうがないからこのボロボロにしがみつくな」という感じぐらいに思えばよい。

そういう時代から、どのように新しい社会を構想していくかということになると、自分たちがつくりあげる関係性のなかにいろいろなものを一体化させて、そこが力を持つかたちでしか突破できないということです。

だから、もっといい民主主義をと思って、うまくいかない。そうではなくて、自分たちの生きる世界を自分たちでつくる。その自分たちの生きる世界のなかに、経済も埋め戻すし、自分たちの働く場もつくっていく。そういう試みが、これからは絶対に必要になっていく。そういうことをしていけるような協同組合であれば、協同組合はこれからの時代のひとつの方向性を示すだろうと思います。

ただ、協同組合という組織でありながら、単なる経済活動だったり、さらにはその経済活動の効率性だけを追求するようになると、名称は「協同組合」でも、実体は違うものになってしまいます。いまの時代は、絶えずそういう危険性もはらんでいる。

その意味では、協同組合運動は、協同組合運動だけに固執しなくてもかまわないのです。ときには協同組合でよいし、ときにはソーシャル・ビジネス的なものを軸に展開するかたちがあってもよい。

たとえば、ぼくが代表をやっている森づくりフォーラムという NPO は、つい半月ぐらい前に全国大会みたいなものを開きました。この NPO は、森づくりフォーラムという名前が示すとおり、森林ボランティ

ア系の人たちの集まりで、その全国大会です。2 日間の大会ですが、パネルディスカッションなどは、できるだけ若い人を中心にします。若い人たちのなかには、いろいろなことをやっている人がいるので、その人たちが壇上にずらりと上がる感じでやりました。

今回が 23 回目ぐらいの大会ですが、メンバーの肩書がずいぶん変わっています。第 1 回大会や第 2 回大会は、壇上に上がって活動している人たちは、だいたいどこかの NPO 的団体に所属していました。当時はまだ NPO 法ができていませんが、今風にいうと「NPO 法人所属」みたいな肩書の人たちがパネルディスカッションでずらりと並ぶという感じでした。

ところが、今回は、NPO 法人所属の人がほとんどいなくて、ほとんどの人が株式会社所属だったりするのです。株式会社といっても、大手企業の人ではなくて、自分たちでソーシャル・ビジネス型の会社をつくっているんです。ソーシャル・ビジネス型ですから、ひたすら会社経営をやっているわけでもなくて、自分たちの仕事をしながら、その仕事を通して地域や自然と結ぶなど、いろいろなことを試みている。いまの若い人は、NPO でやっているというよりも、一般社団法人をつくっているケースもありますが、むしろ会社的な形態を採りながらやっている人がけっこう多くなってきたという感じです。

全国の森林ボランティア団体も、全部で何団体あるのかを調べるのは無理ですが、わたしたちの団体は森林で活動するときには使いやすい保険制度を持っているので、けっこういろいろな団体が保険を使ってくれます。そのことを通して、ある程度、把握できるので、その数でいうと去年あたり

から若干減少しているんです。それまでは増え続けていたのに、です。

NPO が減ってきたという感じはありますが、じつはその理由も、若い人たちが NPO よりも会社をつくっているということなんです。新しく始める人たちは、会社経営で展開させる人が多くなっているのので、NPO 自体が減ってもいいのではないかという感じです。

ばく自身は、「ソーシャル・ビジネス」を本当に翻訳するとしたら「ともに生きる経済」でいいんじゃないかと思っていて、ソーシャル・ビジネスでやろうとしているのは、自然も含めて「ともに生きる経済」を再確立しようという方向です。「ともに生きる経済」をつくろうとすると、結局、社会や信仰や文化などいろいろなことと一体性のある経済、つながりのある経済を志していかなければいけないわけで、そういう活動の母体に協同組合があってもよいし、株式会社があってもかまわない。むしろ、いろいろな形態があってもかまわないと思っています。

ただ、東京などでは、ここ 4～5 年、以前とは違う傾向が出てきています。昔はソーシャル・ビジネス型の企業が志をしっかり守りながら、石にかじりついて経営しているという感じでしたが、最近は一般企業よりもソーシャル・ビジネス型のほうが経営が安定しているというケースが若干出てきています。

というのは、理念や働き方についての考え方などがはっきりしているので、アメリカの従業員協同所有事業体と同じで、働いている人たちが非常に一所懸命に頑張っているということもあるし、そういう会社だから応援しようという人たちもいて、安定的なユーザー層を形成するということが起

きているのです。

ただし、規模は大きくなくて、支える人たちが集まれるぐらいの規模の会社というかたちですが、なかには支えてくれる人たちが 2000～3000 人いる大きな会社もあって、そういうなかで逆の安定性も出てきているわけです。

このように、いまはいろいろな試みがあって、そういうなかに、ただの「地域」ではなくて、どういう関係性をつくるのか、しかも、そこに経済が巡らされているような関係性をどうつくっていくかが課題です。

都市部でも、どういう関係性がいろいろなかたちで集積されていくとわたしたちの社会が変わっていくのか、ということでもあるし、その関係性の世界に経済をどう埋め戻していくかという課題もあって、そこではいろいろな方針があり得ます。そういうことが試みられている時代が、「いま」という時代だというふうに思っています。

したがって、世界的には、とくに先進国においては非常に大きな転換期が始まっていて、その出方ややり方は国によって異なりますが、いろいろな試みがある。そういうことを片方では視野に入れながら、わたしたちのいろいろな活動をやっていったらいいなと思っています。ということで、時間を少し超えましたが、ご清聴、どうもありがとうございました。(拍手)